

## 序言

伊藤幸司

桜圃<sup>さくらぼ</sup>寺内文庫は、初代朝鮮総督・第十八代内閣総理大臣である寺内正毅の意志を継いだ息子の寿一<sup>ひさいち</sup>が建設し、大正十一年（一九二二）二月五日に開庫した寺内家の私設図書館である。文庫は、正毅の蒐集した蔵書を基礎としつつ、これを広く一般に公開することで、郷土山口の子弟教育に資するとともに、学界の利用研究に供することを目的として創設された。開庫後の寺内文庫は、まさに地域の教育図書館としての役割を十二分に果たしていた。その収蔵資料は、日本の古典籍のみならず、正毅が朝鮮総監・総督時代に蒐集した朝鮮関係資料や、明治期以降に出版された洋装本など多岐にわたる。戦後、寺内文庫は寺内家の資金難によって閉鎖されるが、本論第一部で詳述するように、その収蔵資料は現在の山口県立大学へ寄贈されたほか、一部は山口県立山口図書館・国立国会図書館・防長尚武館・大韓民国慶南大学校博物館などにも入っている。

寺内文庫に関する本格的な研究は、昭和四十年（一九六五）成立の日韓基本条約に先駆けて、日本側が国内所在の朝鮮半島ゆかりの文物調査をした一環として、田川孝三が文庫所在の朝鮮本調査をおこなったのを端緒とする<sup>(1)</sup>。その後、山口女子大学（山口県立大学の前身）の國守進を代表とす

る研究グループが、昭和五十年（一九七五）に文部省科学研究費補助金一般研究Cを利用して、文庫成立の経緯や、文学書を中心とする和漢書・朝鮮本・朝鮮古文書の概説的な考察をおこない、文庫所蔵の和漢書目録を作成した。<sup>②</sup> この研究は、基礎的調査プロジェクトではあったが、学外の専門家の協力もあって、それまでベールに包まれていた寺内文庫の概要の一端を明示することに成功した。また、本論第一部における永島広紀論文や編者の拙稿で明示するように、寺内文庫と関係の深い寺内正毅関係文書が国立国会図書館憲政資料室に所蔵されており、これらの資料群を紹介し解題を附した山本四郎による一連の研究もある。<sup>③</sup>

しかし、寺内文庫に関する研究は基本的に極めて低調であったといわざるを得ない。この背景には、文庫資料の一部が植民地時代の朝鮮半島で権力者たる寺内正毅によって蒐集されたものであったため、文庫の朝鮮関係資料Ⅱ「植民地支配の負の遺産」という漠然としたレッテルが暗黙のうちに形成されたことがあったと推測される。ゆえに、寺内文庫を積極的に研究し活用するという雰囲気は熟成されることはなく、「静かに保存する」ことに主眼がおかれていたのではなからうか。そのようななか、山口女子大学に保管される寺内文庫所蔵の朝鮮関係資料の一部が、平成七年（一九九五）韓国の慶南大学校に寄贈された。一連の動向には、文庫資料が寺内正毅による蒐集という性格を有していたことから、文庫資料Ⅱ「掠奪された文化財」という推測的な認識が、韓国国内で注目を集めたことも影響していた。これは、近年、宮内庁書陵部所蔵の「朝鮮王朝儀軌」をはじめとする朝鮮関係資料が韓国側に「お渡し」された状況と類似している。少なくとも、

寺内文庫に関してこのような「思い込み」があるのは、我々研究者が寺内文庫を理解してもらうための客観的な材料を提供してこなかったことに原因がある。また、寺内文庫資料の全貌を広く一般に知らしめるような環境を作ってこなかったことも要因としてあげられよう。

このような状況に鑑み、編者は平成十七年度（二〇〇五）～二十年度（二〇〇八）・二十四年度（二〇一二）にかけて山口県立大学研究創作活動助成を獲得し、寺内文庫の環境整備作業と研究を進めた。さらに、平成十九年度（二〇〇七）からは大学当局によって「桜圃寺内文庫整備計画」が策定され、二十三年度（二〇一一）までの五年間に寺内文庫保管室の本格的な燻蒸作業や図書カードのデータ化などが順次進められた。以上の二つの資金の確保によって、本学の寺内文庫をめぐる環境は格段に向上したといえる。そのなかにあつて、編者にかかる研究活動では、まず桜圃寺内文庫旧蔵資料の伝来過程を明らかにすることを目指すのと同時に、山口県立大学附属図書館寺内文庫所蔵資料のなかでも注目を浴びやすい朝鮮関係資料についての再整理と考察を集中的におこなった。この目的を達成するべく、平成十八年度（二〇〇六）からは六反田豊氏の協力を得ることで文庫所在の朝鮮古文書の研究を進め、平成二十二年（二〇一〇）からは永島広紀氏の協力によって寺内正毅の朝鮮半島における資料蒐集の背景についての分析をおこなった。この間、桜圃寺内文庫旧蔵資料に対する注目も徐々に高まり、その一部が断片的に学界に紹介されることもあった。<sup>(4)</sup>そして、一連の研究活動を通じて、編者や六反田豊氏、永島広紀氏のような研究報告をおこない、その討議を経ることで研究内容を高めてきた。これらの活動が、本書の内容に

直結していることはいうまでもない。以下、これまでにこなったおもな研究報告を記しておく。

- ・伊藤幸司「寺内文庫の変遷と現状」（九州大学韓国研究センター主催研究集会「植民地朝鮮で蒐集された『知』の歴史——朝鮮総督府・京城帝國大学関係者の個人アーカイヴからの視線——」…第二部「朝鮮総督府関係者アーカイブズの現況と今後の研究方向性」、二〇〇八年十二月七日／於・九州大学韓国研究センター）
- ・伊藤幸司「寺内文庫の変遷と現状」（慶南大学校創立六十五周年記念シンポジウム、二〇一一年五月二十日／於・大韓民国慶南大学校博物館）
- ・伊藤幸司「寺内文庫の変遷と現状」（九州史学研究会近現代史部会「植民地の歴史資料と現在」、二〇一一年八月六日／於・九州大学法文系講義棟）
- ・永島広紀「寺内総督期の文化財問題と朝鮮総督府博物館——「桜圃寺内文庫」の成立前史——」（九州史学研究会近現代史部会「植民地の歴史資料と現在」、二〇一一年八月六日／於・九州大学法文系講義棟）
- ・六反田豊「桜圃寺内文庫所在朝鮮古文書の概要と特徴」（平成二十四年度九州史学会朝鮮学部会シンポジウム「日本伝存の朝鮮文化財をめぐる研究の現在位置」、二〇一二年十二月九日／於・九州大学法文系講義棟）

以上のように、本書は編者が中心となって平成十七年度（二〇〇五）から進めてきた研究作業の成果の一部である。以下、簡単に内容を紹介しておく。

第一部「桜圃寺内文庫の解題」は、桜圃寺内文庫旧蔵資料の成立過程や変遷について総合的に考察した。國守進「桜圃寺内文庫の成立」は、昭和五十一年（一九七六）に刊行された同氏編の報告書に収載された論文である。寺内文庫の開庫状況や以後半世紀にわたる文庫の概説としては、現在においても唯一のものであることから、著者の許可を得て本書にも再掲することとした。伊藤幸司「桜圃寺内文庫の変遷と現状」は、國守論文の内容を補足しつつ、現在に至る桜圃寺内文庫旧蔵資料群の分散状況を考察したものである。永島広紀「寺内正毅と朝鮮総督府の古蹟・史料調査——「桜圃寺内文庫」の成立前提史——」は、寺内文庫に収蔵される朝鮮関係資料の性格や、その形成過程について実証的に斬り込んだ労作である。永島論文によって、従来見落とされていた寺内正毅や寺内文庫の本質が正当に評価されていくことを願っている。

第二部「桜圃寺内文庫の資料目録」は、寺内文庫に関する目録のうち、とくに重要と思われる六つの資料目録を作成して掲載した。「桜圃寺内文庫開庫時所蔵資料目録」は、文庫が開庫した大正十一年（一九二二）に発行された目録であり、その時点で貴重と考えられた七九九〇冊八七八部が掲載されている。寺内文庫は、開庫以降、寄贈や購入によって蔵書が大幅に増加している。その意味では、本目録に掲載される貴重書群は、寺内正毅の意向を一定程度反映して蒐集された性格の資料であり、文庫の基盤となる蔵書であったことが分かる。

「山口県立大学附属図書館寺内文庫所在朝鮮本目録」は、山口県立大学に保管される朝鮮関係資料のうち、朝鮮本のみを取り上げた目録である。従来、知られている寺内文庫の目録には國守進

編の報告書に収載される「桜圃寺内文庫和漢書目録」があるが、この目録は和漢書とともに朝鮮本も混在したものであるため非常に使いにくかった。今回、文庫の再整理作業をおこない、朝鮮本のみを四部分類して詳細な書誌データを附した。「山口県立大学附属図書館寺内文庫所在朝鮮古文書目録」は、山口県立大学に保管される朝鮮関係資料のうち、朝鮮古文書のみを取り上げた目録である。朝鮮本と同様、文庫の再整理をおこない、古文書を様式ごとに分類して詳細な書誌データを附した。本目録は、第三部「桜圃寺内文庫の朝鮮古文書解題」と連動している。「山口県立大学附属図書館寺内文庫所在写真帳目録」は、山口県立大学に保管される写真帳のみを取り上げた目録である。従来、これらの写真帳の存在はそれほど知られていなかったが、寺内文庫には公的な刊行物以外にも、多様な目的で作成された私家版の孤本ともいえる写真帳が収蔵されている。それらは、日本関係のみならず朝鮮関係のものも多く含んでおり、今後の活用が期待される。以上の三つの目録は、山口県立大学附属図書館寺内文庫に関わるものである。本来であれば、國守進編の報告書に収載される「桜圃寺内文庫和漢書目録」のデータを更新する総合的な目録を掲載すべきであったが、紙幅の都合上、さきの三つの目録のみとなったことをお断りしておく。

「山口県立山口図書館所在桜圃寺内文庫旧蔵資料目録」は、桜圃寺内文庫（寺内家）から山口県立山口図書館に寄贈された資料目録である。山口県立山口図書館に保管される寺内文庫旧蔵資料は、従来、その存在自体の認知度も低く、ましてその全貌を周知するような研究成果はなかった。一方、「慶南大学校所在桜圃寺内文庫旧蔵資料目録」は、平成七年（一九九五）に山口女子大学か

ら韓国の慶南大学校に寄贈された寺内文庫旧蔵資料の目録である。さきの事例と同様、慶南大学校に寄贈された資料の全貌も、日韓双方の学界で必ずしも周知されているとは言いがたい。ゆえに、「山口県立山口図書館所在桜圃寺内文庫旧蔵資料目録」「慶南大学校所在桜圃寺内文庫旧蔵資料目録」の存在によって、最低限の情報を共有できるようになったと考えている。

第三部「桜圃寺内文庫の朝鮮古文書解題」は、山口県立大学附属図書館寺内文庫所在の朝鮮古文書について、総論として文書群の性格を明示した上で、様式的に分類された文書を一点ごとに紹介している。その叙述は、一点ごとに本文を翻刻した上で、詳細な解説を加えるのみならず、モノクロの写真版も掲載している。第三部の編者である六反田豊氏による労作であり、朝鮮古文書の研究史に特筆されるべき成果だといえよう。

以上、本書の登場によって、桜圃寺内文庫の研究は新たな局面を迎えたのと同時に、文庫を総合的に考察していく土壌が整ったといえよう。今後、桜圃寺内文庫旧蔵資料が、今まで以上に活用されるようになることを祈念したい。

注

- (1) 田川孝三編『桜圃寺内文庫朝鮮本調査報告』(一九六五年四月)。
- (2) 國守進編『昭和五十年度文部省科学研究所補助金一般研究C研究成果報告書 桜圃寺内文庫の研究』(山口女子大学歴史学研究室、一九七六年)。
- (3) 山本四郎編『京都女子大学研究叢刊5 寺内正毅日記——一九〇〇—一九二八——』(京都女子大学、一九七〇年)、同編『京都女子大学研究叢刊9 寺内正毅関係文書——首相以前——』(京都女子大学、一九七四年)、同編『京都女子大学研究叢刊10 寺内正毅内閣関係史料(上)』(京都女子大学、一九八五年)、同編『京都女子大学研究叢刊10 寺内正毅内閣関係史料(下)』(京都女子大学、一九八五年)。
- (4) 木越俊介「桜圃寺内文庫収蔵資料から——『補訂刻正 絵本漢楚軍談』について——」(『YPU Library』第二号、二〇〇六年)、加藤禎行「桜圃寺内文庫収蔵資料から——夏目漱石著『漾虚集』(十一版)について——」(『YPU Library』第三号、二〇〇七年)、伊藤幸司「桜圃寺内文庫収蔵資料から——『三綱行実』について——」(『YPU Library』第四号、二〇〇七年)、権斗煥(小林純子訳)「豊山洪門所蔵英・荘・正祖三代御筆札」(『朝鮮学報』第二二〇輯、二〇一一年)。また、本論第一部で触れるように、慶南大学校博物館から寺内文庫資料を紹介する汗馬古典叢書が順次刊行されている。